3 「東大キャンパス史と建物の維持・修理そして未来」

藤井 恵介

東大キャンパス史とのかかわり

○藤井　藤井でございます．私も東京大学で教員を務め，この３月で無事に定年退職をしました．きょうは，前半で私と東大キャンパス史との関わりについて説明し，後半で東大本郷キャンパスの建築群の将来について考えてみることにします．

先ほど西村先生が『東京大学本郷キャンパス』の出版の話をされましたが，私は二年ほど前に西村先生から執筆のお誘いを受けました．これは私にとって渡りに船でありました．後で詳しいことを申し上げますけれども，1988年ごろに東大キャンパスに関する情報を集めるきっかけがありました．その後も私は，工学部の建築史研究室にいたものですから，東大の施設や建築の情報を蓄積し続けていたのです．そうして情報が大量にたまっていたところにこの出版企画がきまして，それならば，蓄積してきた情報をなるべく公表してしまおうと思いました．ちょうど定年退職の直前のタイミングだったので，ありがたかった．この本をご覧になっていただくと，沢山の情報がいろいろなところから拾われているのですが，実際には，その裏側にさらに大量の資料群があります．同書を読んでいただいて，資料を少し探してみると，このことがおわかりになるでしょう．

私は1988年，今から三十年前ぐらいに，東大の工学部の助手だったのですが，総合研究資料館に建築史部門があり，そこで時々仕事をしておりました．この組織は今の総合研究博物館です．ある日，私は青柳正規（本学名誉教授，美術史）・赤澤威（高知工科大学・国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学名誉教授，先史人類学）両先生に呼びつけられて，「今度，東

京大学本郷キャンパス百年の展覧会[23]を資料館でやるのだが，お前が担当せよ」とひとこと言われました．私はいろいろ世話になっていたので，嫌とは言えないものですから，「はい」と答えてしまったのです．しかし，私は平安時代と鎌倉時代の仏教建築史が本職だったので，完全なお門違いです．大学の中というのは乱暴なものでして，このころ，上から言われたら反論できない．お二人とも親しくしていたので，後で大変助けていただいたのですけれども，人間関係というのは微妙なものです．

そこで本郷キャンパスの歴史に関わるモノを探しました．『東京大学百年史』[24]には，私の指導教授だった稲垣栄三（東京大学名誉教授，建築史）先生が重厚な大学キャンパス史概説を四,五章書いています．これは当然尊重されるべきなのですけれども,『百年史』という書籍を陳列して展覧会，というわけにはゆきません．先ほど西村先生が見せてくださった大学のキャンパスの変遷図も明治15年頃のものから現存しているのですが，これを並べても展覧会にはなりません．ですから展示品を探さねばなりませんでした．

さて，実際に東大のキャンパスを見ればわかりますように，関東大震災以後の建物はかなり残っています．しかし，それ以前の建物はほとんど失われてしまいました．そこで，かつての建物の「情報」を探してゆきました．

当初から存在がわかっていたものには，まず工学部建築学科所蔵の写真がありました．明治期の写真の焼きつけやガラス乾板などです．

次に『コンドル博士遺作集』[25]という本に収録されている建物配置図があります[26]．東京大学はもともと神田錦町の，今の学士会館の場所にありました．

---

23 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988］.

24 東京大学百年史編集委員会編［1984］［1985］［1986］.

25 コンドル博士記念表彰会編［1931］，http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688922（2019年8月26日最終閲覧）.

26 東京大学キャンパス計画室編［2018：51］「ジョサイア・コンドルによる東京大学建物配置案」.

そこから本郷に移ろうというときに，ジョサイア・コンドル―初代の建築学科の先生ですが―は東京大学の最初のキャンパスの設計を求められて，全体配置図と鳥観図を描きました．

工部大学校の写真もありました[27]．工部大学校は，工学部の前身学校で，虎ノ門―今の文科省，霞が関ビルのところ―にありました．大きな写真ですが，焼付けなので，ぼろぼろですが直しようがないです（図13）．拡大してみると大変見事な建物が建っているということがわかります．建築家ボアンヴィル[28]が設計した建物が中心にあり，少し前にアンダーソン[29]という建築家がつくった建物があります[30]．

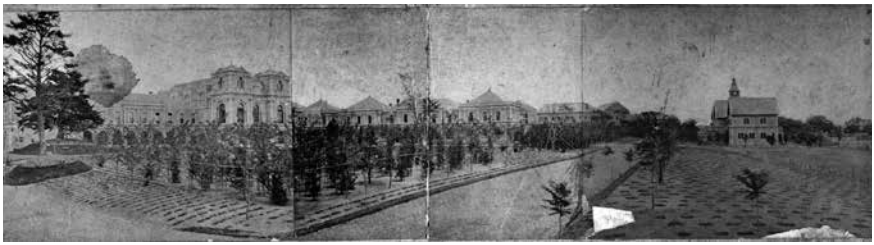

図 13 「工部大学校（虎ノ門）全景」
所蔵・画像提供：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

工部大学校の中央にあった建物の内部写真もありました[31].大変立派な講堂（ホール）がありました．工部大学校の校舎は後に敷地ごと学習院へ譲られました．後に倉庫になっていた時の写真もありますが，よろしくないですね．それで今回の『東京大学本郷キャンパス』には，別の写真を使いました[32]．こ

27 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：62-63］.
28 Alfred Chastel de Boinville. 1850-1897．フランスの建築家 . 1872 年来日し , 工部省雇となる（日本人名大辞典，堀［2003］）.
29 William Anderson（泉田［2016］）．1842-1895.「英人造家棟梁」．1872 年，工部大学校の前身である工部省工学寮で校舎建築のため雇入れられた（旧工部大学校史料編纂会編［1931：41］，堀［2003］）.
30 講堂および左翼はボアンヴィル設計，小学校および大教師館はアンダーソン設計（東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：53, 64］）.
31 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：64］.
32 東京大学キャンパス計画室編［2018：41］「工部大学校講堂内部」.

の写真では，個々人が使う机が並んでいるのが見えます．ホールとしての使用は稀ですから，普段は図書館の閲覧室として使用していたのです．裏側に書庫がくっついています．

次にこちらの写真を見てみましょう[33]．これは本郷に移ってきた後の建築学科，つまり工科大学の写真と，あまり見ることのない施工中の写真です（図14）[34]．それから，明治９年竣工の医学部本館を明治43年ごろに撮った写真もありました[35]．

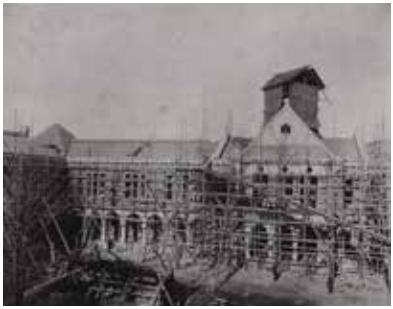

図 14 「工科大学本館」「工科大学本館，施工中」
所蔵・画像提供：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

それから，工科大学の建物を建てるときの仕様書が現存しています（後掲図21）．明治19年ごろに描かれた図面です．

もう一つ資料として，小川一真[36]の『東京帝国大学』[37]が知られていました．パリで1900年に万博が開かれたのですけれども，この写真集はそのとき日本の展示品として作られました．当代随一の写真家小川一真が撮った大変立派な写真集で，コロタイプ印刷の写真が百点ぐらい載っています．湯島の近現代建築資料館（旧岩崎久弥邸）で現在開かれている明治期の学校建築の展

33 東京大学キャンパス計画室編［2018：57］「工科大学本館」.
34 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：88］.
35 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：70］.
36 小川一眞．1860-1929．写真家．アメリカで写真術を学ぶ．宮内庁による全国宝物取調べなどにも関わり，『国華』編集などにも関与する（日本人名大辞典）.
37 小川［1900］, http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813161（2019 年 8 月 26 日最終閲覧）.

覧会[38]に，この写真集は東大文書館から貸し出されています．東大学内でもこの本は三冊ぐらいしか存在せず，手に入れにくい書籍の一つでしたが，今では附属図書館ウェブサイトから閲覧可能です．大変便利な写真集で，使いたくなる写真が多く収録されています．

この写真集には，先ほども言及されました，横広がりの写真が掲載されています（前掲図１）．これは明治33年ごろ，いや，もう少し前の1899年ぐらいに撮っていると思うのですが，東大を正面上方から撮影したものです．左から右に工科大学，理科大学，法科・文科大学，図書館と並んでいます．この写真をよく見ると，継いであることが分かります．当時はパノラマ写真が撮れないので，写真同士を上手に継いで一枚にしているわけです．

小川一真の写真ですので，アングルも非常によいです．図書館内の写真[39]，法科・文科大学の校舎・階段教室[40]，理科大学の校舎[41]，医科大学の中の階段教室[42]，理科大学の列品室[43]も撮影されています．この写真集は第二版が出ていますが，そこには駒場にあった農科大学[44]も入っています．

次に見つけたのが施設部所蔵の建築図面です．明治30年代ごろの建物の図から残っています．このときの調査以前は全く見たことがなくて，どうしてこの図面にたどり着いたか記憶していません．今はかなり電子化が進んでいまして，施設部

図 15 「医科大学病理学教室改築実施図面，正面入口詳細図（縮尺 20 分の 1）」
所蔵・画像提供：東京大学施設部

38 国立近現代建築資料館開館五周年記念企画「明治期における官立高等教育施設の群像」，http://nama.bunka.go.jp/kikak/kikak/1809/（2019 年 8 月 22 日最終閲覧）．
39 東京大学キャンパス計画室編［2018：61］「図書館閲覧室」．
40 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：76-77］．
41 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：80］．
42 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：71］．
43 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：81-82］．
44 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：83］．

に頼むと見せてもらえる状況になっています．具体的にはこのようなものです（図15）[45]．美濃紙に筆書きの大変きれいな線で描かれ，淡彩で着色されています．そして，綴るために右側に丸いパンチの穴が開いています．建物一棟について三十から四十枚ぐらい描かれています．図面が散逸した建物もあるのですけれども，全体で二千〜三千枚ぐらい存在しています．なお大正以後になりますと，図面をトレーシングペーパーに烏口ペンで描くようになります．おそらく，このような美濃紙の図面は，近世的な作図の世界と現代のそれとの過渡期にあるものでしょう．

さらに幸運なことに，1987年に，内田祥三先生直筆の図面が内田家から建築学専攻に寄附されました．これは内田家自体の引越しに際したものです．内田先生が設計した大講堂の当初案の図面[46]（実施されなかった），図書館の図面[47]第一案，第二案（実施案）などがあります．

震災で壊れた工科大学本館の瓦礫を掘り出すことでかなり展示品がふえました．というのは，当時歴史研究室の技官だった田中晶さんから，震災後に本館の瓦礫を北側の敷地内に埋めたことを聞き，個人的に掘ろうという話になったのでした．今，こんなことをすると怒られてしまいます．博物館玄関前に柱頭を四つ置いてありますが，その中の三つはそのときに掘り出したものです（図16）．残りの一つ，上に向けて斜めに細くなっている柱頭は，かつて図書館を拡張したときに出土したものです．

図 16 「工科大学本館柱頭」
所蔵・撮影：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

このようにして，資産あるいは

45 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：38-41］.
46 東京大学キャンパス計画室編［2018：103］「内田祥三当初設計案」.
47 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：44］.

展示品が増えてゆきました．そして，今ご覧に入れたような資料を展示して展覧会を開催し，カタログ[48]をつくったわけです．

東大内外の資料を顕在化する

これから後も資料が続々と増えてゆきます．これは懐徳門の門塀の代わりになっていますが，本来は，もう少し奥のほうにあった前田公爵家の邸宅の基礎でした（図17）．博物館を拡張したとき地中に発見されたので，切り取って地上に持ちあげて，後に懐徳門に利用したわけです．

図 17 「懐徳門門塀」撮影：藤井恵介

さらに，施設部所蔵の古写真も出現しました．施設部は，大正８年に安田講堂を建設する過程の写真から，その直後に関東大震災で大学が罹災した写真，さらにその後の再建プロセスの写真のガラス乾板を四千枚ほど所蔵していたのです．一時期，大学史史料室（現在の文書館）に移り，その後に総合研究博物館に移管されました．現在はウェブ上で公開する手続きが進められています[49]．徐々に公開されるようなので，博物館のサイトで楽しんでいただきたいと思います．

48 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988］.

49 東京大学総合研究博物館小石川分館蔵　東京大学本部施設部旧蔵写真資料，http：//umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DAnnex/old_collection_photographs_home.php（2019 年 7 月 29 日最終閲覧）．2019 年 7 月 29 日現在「a. 東京帝国大学営繕工事記録写真帳」は閲覧可能，「c. ガラス乾板およびフィルム」その他は準備中.

そして平賀譲[50]関係の資料である戦前の船舶の図面が出てきました．これは，スペースの関係から最終的に柏図書館に保管されました．ウェブ上で公開されています[51]．

このように徐々に学内で「忘れられた資料」が，改めて出現してきたのですが，引き取り手が少ないのが実状です．既述の施設部所蔵のガラス乾板も，結局，施設部が持ち切れないというので，そのころの大学史史料室にいた中野実さんに頼んで引き取って．また建築学科で引き取った内田祥三関係資料は建築図面類だけでして，東京大学の学内行政関係を東大の大学史史料室，行政文書は東京都公文書館に寄贈しました．その中の東京都公文書館所蔵の書類綴の中に入っていた資料[52]によって，内田先生が大正８年ころから震災後にかけてどのように大学の計画を立てたかがわかるようになりました．今回，森朋子さんが発見した大きな成果です．

次に，宮内庁所蔵の行幸関係資料というものもあります．天皇が東大に行幸したときに，どこでどんなことをしたかということがわかる資料です．これは，宮内庁の資料にある天皇が明治19年に行幸したときの図面です（図18）[53]．もとの図面は，東京大学内部で制作された図を下敷きしたものです．天皇が鉄門から入って，学内の校舎を

図 18 「帝国大学略図」『幸啓録 3　明治19 年』所収，
所蔵・画像提供：宮内庁宮内公文書館

50　平賀譲．1878-1943．造船工学者．1918 年東大教授．1938 年東大総長となり平賀粛学を断行．造船中将であり，戦艦長門などの設計で知られる（日本人名大辞典）．
51　東京大学柏図書館・呉市海事歴史科学館所蔵　平賀譲デジタルアーカイブ，https：//iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/hiraga/page/home　（2019 年 7 月 29 日最終閲覧）．
52　東京大学キャンパス計画室編［2018：101］．
53　東京大学キャンパス計画室編［2018：69］「天皇臨幸時の経路図」も参照．

巡って，最終的に法文の建物の中でお休みいただいて，赤門から出て行くという経路が線描きしてあります．東大の卒業式を図書館の中で行うのが恒例になると，天皇の行幸があるので，図書館西側奥に玉座をつくって，その前に卒業生が並ぶようになりました（図19）[54]．

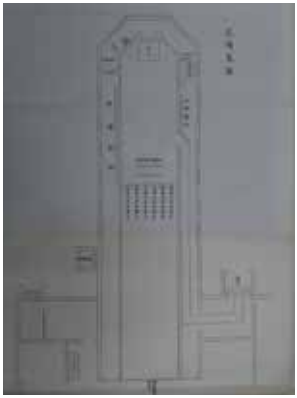

図 19 「式場畧図」『幸啓録 2 明治 43 年』所収，所蔵・画像提供：宮内庁宮内公文書館

最近では，明治30年から大正９年までの施設部所蔵東大建物調や，明治20年代からの施設部所蔵契約関係書類も少しずつ参照されるようになっています．

これは，ある人が論文に使っていたので今回電子化してもらった明治30年の「東京帝国大学土地建物調」（図20）[55]です．この図の赤で描かれているのがレンガ造，ほかの色が木造です．これをよく見ると建物の中のプラン―例えばここが史料編纂室（史料編纂所の前身）であるなど―が，書いてあります．この資料を使えば，東大のキャンパス史をもう一回書き直すことができるでしょう．ただ，相当に手間がかかりますので，まだまだ私たちも手を付けていません．

図 20「帝国大学全体配置之図」『東京帝国大学土地建物図』所収，所蔵・画像提供：東京大学施設部

実は青柳先生から，1988年の展覧会が始まった直後，小声で「文学部関係の写真が全然出ていないではないか」と小言を言われました．法文科大学校舎の裏側を撮った写真[56]ぐらいしか展示していなかったからです．今回，さ

54 東京大学キャンパス計画室編［2018：93］「天皇臨幸時の卒業式「式場畧図」」も参照．
55 東京大学キャンパス計画室編［2018：91］に「本部の位置」として部分的に掲載．
56 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編［1988：76］．

きほどの土地建物調に文学部の図面が書かれていますので，宿題を三十年後にはたすことができました．文学部の図面の一階部分には教員控室が示されているのですが，面積計算すると教員一人当たり四平方メートルほどしかありません．理学系，工学系では実験室，演習室があるので，一人当たりの面積は相当広いのですから，大変気の毒な話です．昔から理系と文系は差がありました．今でも文系の学生が図書館で勉強しているのは，当時の名残かもしれません．

図 21a「工科大学新築洋風二階建三階家共煉化石造経費概算調」（22-23 頁，部分，2 図を接合）
所蔵・画像提供：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

ちなみにこちらは，明治20年ごろの工科大学の仕様書（図21）です．この土地建物調には，面積などが非常に詳細に書かれています．要するに，この図面は学内の状態を示す公文書の一種だと思われます．もう少し年代が下りますと，教師館の中のプランが細部まで書かれているものがでてきます．

図 21b「工科大学千分之壱図」
所蔵・画像提供：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

施設部所蔵の契約関係の書類も膨大にあります．歴史資料としてどう扱うかは今後の課題です．たとえば大正11年の『国有財産調材料　営繕課』という簿冊がありますが，建物の面積や建築年まで書かれています．これはおそらく大正11年当時に編集され，戦後になってからも学内で使われていました．こういう資料は相当数ありますので，今後学内を捜索すれば，キャンパスの建築状況を知るための資料がさらに見いだされると予想されます．

このようにして蓄積された図版を元にして『東京大学本郷キャンパス』ができたわけです．つまり私がこれまでに行ってきたのは，東大の内外に貯蔵

されている資料群を顕在化して，意味を持たせてゆくプロセスでした．公表することの重要性は，それを知っている人をふやすことにあります．次に「文化財」化します．例えば帝国大学時代の文部省往復を中心に国の重要文化財に指定しました．重要性を認識しないまま部署ごとに長年維持してきた資料が，それを文化財とすることによって所有者の意識が変わり，どうでもよいものから捨ててはいけないものへと切り替わっていきます．そういうものを増してゆくのです．

地面の中から掘り出した幾つかの柱頭は，きょう，ここでお話をしたので，出席された人はみな覚えています．「博物館のあれは，あのときに掘ったものだ」，と理解したので，三十年くらい記憶のなかで寿命が延びたことになります．理想的には学内で登録して保存するする仕組みができればよいのですが，現状ではこうやって記憶に残すという形でやるしかありません．

また資料というものは，基本的に文化財とクズの中間にあるものです．ある人は重要だと言って騒ぐけれども，ほかの人にはクズのようなもので，いつ捨てられるかわかりません．しかし重要文化財となれば，大事にされます．ですから，重要文化財という盾になるものを公開することによって，ほかのものもそれに関連づけて説明すれば，廃棄の危機から救える可能性があります．非常に楽天的かもしれませんが，私はこのように考えているわけです．

学内資料は，特に古くからある学科や専攻の内部でいろいろと保存されています．その中には，過去の学者の痕跡がありますが，これをどう扱うのか問題があります．私の周りでいえば，関野貞[57]という明治，大正，昭和を通じた建築史の大先生のものは，調査して永久保存することになっています．他方で，最近困ってしまったのは，私の三代前の，太田博太郎[58]先生の資料です．この人も大先生ですが，最終的に遺族に資料の引き取りをお願いする

57 関野貞．1868-1935．建築史家．奈良県技師をへて 1901 年東京帝大助教授，1920 年教授．古社寺建築の研究，保存につとめた（日本人名大辞典）．
58 太田博太郎．1912-2007．建築史家．法隆寺国宝保存事務所などをへて，1960 年東大教授（日本人名大辞典）．

ことになりました．残念ながら，その痕跡はほぼ消えつつあります．このような学内資料をまとめてゆくにはいろいろな方法があるでしょうが，とにかくネットワーク化していつでも参照できるような仕組みを構築するべきです．さらに，どなたかがキーパーソンになって情報集約し，そこからやりとりできるようになるとよりよいでしょう．

東大本郷キャンパスの建物の特質と維持・修理そして未来

最後に，建物そのものの保存について少し提案したいと思います．

東京大学本郷キャンパスの建物は，関東大震災でほとんど壊れてしまい，空襲でも一部が被害を受けました．ですから，このキャンパスに現存するのは，昭和初年からのものが中心です．

このキャンパスを計画した内田先生の仕事を見ていますと，明治初期の痕跡は一部残っているのですが，極めて近代的であり，旧建物の痕跡をあまり大事にしていない感があります．これは内田先生一流の手法なのでしょう．

ただ，現在の我々は，建物を長期的に見るといろいろな可能性があることを知っています．私が内田先生の時代にキャンパス計画に関係していたら，それ以前の時代の痕跡をもう少し残したと思います．では，改修をするときに具体的にどうすべきでしょうか．それには短絡的に決断しないでモラトリアムを設ける，つまり我慢することを提案したいと思います．というのは，時間の経過とともに，建築の価値が変わります．さらに，建物を維持し続けることによって時間の積層化が起きます．単体でも群としても積み重なった時間を持った建築を共存する，それはそれで大変面白いことです．

東京駅の例を見てみましょう．東京駅は1980年代ごろから保存が議論されてきましたので，私たちは同時代的に観察してきました．最終的に改修計画が検討されたのは，1999年あるいは2000年になってです．つまり，約20年かけて議論に決着がついて，重要文化財になりました．それから改修工事が実施されたのは2007年です．議論が始まってから30年くらい経っています．要するに，このような古い建物の処遇は，合意形成できなければ放っ

て置くしか方法がありません．言い換えれば，所有者が我慢するしか方法がないということです．東京駅の場合，壊すという選択肢で合意できなかった．しかし，どうしてよいかわからなかったので放置した．そうしているうちに，状況や法制度が変わって空中権が隣に移転できるようになる，などの展開が可能になりました．この例からも，古い建物については，あまり短絡的に判断してはいけないことがわかります．

また現在の日本は，建築の延命に必要な技術を開発している最中であります．もう少し待てば，さらに優れたいろいろな方法が開発されて，大学の中の建物に適用できるようになるでしょう．

さらに言うと，キャンパスを面白くすることが大変重要だと思っています．近年，東大の中で話題になった大講堂と懐徳館を例にしてみましょう．大講堂が重要文化財にならなかったことは，西村先生にも私にもとても無念でした．そうなると，大講堂の利用頻度や使用価値をどれだけ上げるかという課題が出てきます．使用頻度を上げる努力をしないと，大学の中でも建物を持ち切れないことになりかねません．例えばオックスフォード大学のシェルドニアンテアトル（講堂）は，利用頻度を上げるよう非常に努力していて，見学はもちろん，音楽会や諸々のパーティーなどを開催しています．オックスフォード大のホームページを見ると，とても楽しい場所という演出をしています．

「懐徳館」はご存じない方が多いでしょう．なぜか知られていないかというと，非公開物件だからです．本郷三丁目の交差点の東北側奥に，元加賀藩主の前田家が住んでいた邸宅がありました[59]．その洋館は空襲で焼けましたが，庭の部分はほぼ現存しております．また戦後建てられた立派な木造建築[60]も現存しています．しかし，大学当局はこれをどのように経営していいのかわからないので，ほとんど何もしていないのですね．博物館の南側に回ると，隈研吾（本学工学系研究科教授）さんが設計した情報学環のダイワユビキタ

59 東京大学キャンパス計画室編［2018:95］「1936（昭和 11 年）の懐徳館（旧前田侯爵邸）と庭園」.
60 東京大学キャンパス計画室編［2018：177］「庭園から懐徳館を見る」.

ス学術研究館があります．そこのレストランの中から，懐徳館の庭園を覗くことができます．このような施設を上手に使って，東京大学キャンパスを面白くする努力が，これから必要であろうと思います．

最後に，現在の東京大学本郷キャンパスの建物を大事にしながら，今後百年間美しいキャンパスをつくろうと努力したなら，そのときには欧米の古い歴史を持つ大学に匹敵するような立派なキャンパスが実現されているだろう，と予言したいと思います．東京大学オックスブリッジ化計画とでも言えばいいでしょうか．オックスフォードとかケンブリッジに行くと，歴史的な建物を維持しつつ，現代建築を組み込みながら大変見事なキャンパスが築かれています．以上は，本日の聴衆である若いみなさんに対する期待でもあります．

○鈴木　ありがとうございました．休憩の後，角田先生と木下先生にご講演をお願いしたいと思います．